

これは、動物が話をしていたころ、ずっと遠くの国でのお話です。

王さまの庭に、とても澄んだきれいな泉がありました。泉の水は、冷たくて蜜のように甘かったので、王さまは、ひとりじめにして、だれにも飲ませませんでした。

ある朝、王さまは、夜のうちにだれかが泉の水をくみに来たことに気づきました。そこで、見張りを立ててどろぼうをつかまえようと思いました。ところが、それから毎晩、水はぬすまれました。そこで、王さまは、こんなおふれを出しました。

「泉の水をぬすんだやつをつかまえた者は、王女と結婚させよう」

たくさん動物たちが、おふれを聞いてやって来ました。けれども、みな、夜、見張っているうちに眠ってしまつて、どろぼうをつかまえることはできませんでした。

ある日、かめが、泉の見張りをしようと考えました。

かめは、朝のうちに糊を作つて、昼からは眠つてすごしました。夜になると、かめは、背中に糊をいっぱいぬつて、お城に出かけて行きました。そして、泉のまんなかにある岩の上にすわると、頭と手足をこうらの中にひっこめて、石のようにじつとしていました。

真夜中、かさかさという小さな音が聞こえました。かめが頭をそつと出して見ると、月の光の中に、野うさぎがいつぴきあらわれました。野うさぎは、背中になべを背負つて、こつそりこつそり泉に近づいて来ました。そして、あたりをしつかり確かめてからいいました。

「今夜はだれもないのか。こりやあいい。時間もたつぷりあるし、ひと口飲んでから、なべにいただくでしょう」

野うさぎは、身をかがめてひと口飲みました。

「ああ、蜜みたいにあまいぞ。でも、泉のまんなかのほうが、もつとおいしいに違いない」

野うさぎはそういつて、岩から岩に飛び移つて、まんなかの岩の石の上に腰を下ろしました。そのとたん、おしりが石にくっついてしまいました。石だと思つたのは、かめの背中、糊がたつぷりついていたので。

「なんてこつた。いったいどうなつてるんだ。動けないじゃないか」

野うさぎがびつくりぎょうてんしていると、かめが頭を出して、いいました。

「どろぼうは、おまえだつたのか。王さまがお待ちかねだ。ただじゃすまないよ。水をぬすんだことを後悔するぞ」

かめは、野うさぎを乗せたまま、岸に向かって泳いでいきました。そして、泉から上がつてお城のほうに歩きだしました。野うさぎは、泣きながら、いいました。

「なあ、かめの大將。放しておくれよ。友達になろうじゃないか」

「だめだめ。おまえはどろぼうだ。つかまつたら罰を受けるのさ」

「いじわるやろう。おれを放せ。さもないとたたきのめしてやるぞ」

「むだだよ。できるもんならやってごらん」

「ようし。これでもくらえ」

野うさぎは、前足で、かめに一発おみまいしました。ところが、足がこうらにくっついて、引っ張つても離れません。怒って、後ろ足で飛べたら、その足もくっついてしまいました。かみつこうとすれば、鼻がこうらにくっついて離れませんか。野うさぎは、恐ろしいし腹は立つし、あばれようにも、動くこともできなくなりました。

夜が明けると、かめは、まっすぐ王さまの部屋に行きました。王さまは、家来たちに野うさぎを引き渡しました。糊をはがすのはたいへんでしたが、お湯をかけて何とか離しました。

王さまとかめは、王女さまを起こして、三人で大広間に行きました。そこには、お城じゅうの人がみんな集まっていました。そこで、かめと王女さまは結婚式を上げました。宴会のごちそうは、野うさぎの煮こみと串焼きでした。とっつもおいしくて、みんなは指までなめました。

かめと王女さまは、子どももたくさんできて、幸せに暮らしましたとき。

おしまい

原話…『フランス民話の世界』樋口淳・樋口仁枝編訳／白水社
再話…村上郁